

以南東部地区経営体育成基盤整備事業に伴う  
佐利保谷遺跡発掘調査報告書

2004年12月

斐川町教育委員会

いなんとうぶ  
以南東部地区経営体育成基盤整備事業に伴う

さりほだに  
佐利保谷遺跡発掘調査報告書



島根県斐川町の位置

2004年12月

ひかわらう  
斐川町教育委員会

## 序

古代の斐川町は「出雲郡」に属し、4つの郷と1つの里で構成されてきました。本遺跡のあるあたりは風土記が書かれた頃は「健部郷」とされていますが、以前は宇夜都弁命が山の峰に天降られたので「宇夜里」と呼ばれていたことが記されています。「神庭」という地名もここからきたものではないでしょうか。

町内では土地改良や農道整備などの農業基盤整備が進み、そのたびに遺跡の発見がみられます。多くの場合は記録保存ということになりますが、大量の銅剣が発見された神庭の荒神谷遺跡のように特に貴重な遺跡は保護保存され、活用されています。

このたび神庭の地で佐利保谷遺跡の調査が行なわれ、若干の遺構遺物が発見されましたので、本書にその概要を収録しました。

本書が多くの方の手にわたり、埋蔵文化財保護に対する理解と関心が高まる一助となり、郷土学習の手助けになれば幸いです。

最後に、調査にご協力いただいた島根県出雲農林振興センターはじめ、地元の皆様、関係者の皆様に厚く謝意を申し上げます。

平成16（2004）年12月

斐川町教育委員会

教育長 古川 君 和

# 例 言

1. 本書は、斐川町教育委員会が平成15年度に実施した以南東部地区経営体育成基盤事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は次のとおりである。  
佐利保谷遺跡 島根県簸川郡斐川町大字神庭747番地外
3. 調査組織及び期間は次のとおりである。

## 【組織】

調査指導 島根県教育委員会

調査主体 斐川町教育委員会

## 【平成15年度】

事務局 陰山 昇（文化財課長）、原 賢二（同 主事）

調査員 宍道年弘（文化財課係長）、佐々木歩美（同 主事）

調査補助員 大田晴美（文化財課臨時職員）

## 【平成16年度】

事務局 陰山 昇（文化財課長）、原 賢二（同 副主任）

調査員 宍道年弘（文化財課係長）

## 【期間】

発掘調査 平成15年9月26日～平成16年3月22日

報告書作成 平成16年7月21日～平成16年12月20日

4. 現地調査及び資料整理に際しては、下記の方々にご助言、ご協力いただいた。（順不同・敬称略）  
水野正好（奈良大学）、高島英之（（財）群馬埋蔵文化財調査事業団）、丹羽野裕（島根県教育委員会文化財課）、内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター）、平石 充（島根県古代文化センター）、石原 聡（大社町教育委員会）、江角 健（斐川町教育委員会文化財課）、阿部賢治（同）
5. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事していただいた。（順不同・敬称略）  
池淵一夫、岡田 實、小松原茂、昌子守蔵、昌子安正、高木善郎、福島元義、福岡立身、高木 博、飯塚節子、青木知子、勝代 勇、多々納孝夫、長谷川房夫、樋野康江、樋野 忠、矢野文一、矢野政子、中村裕之
6. 本書で使用した挿図の方位は磁北であり、レベル高は海拔である。
7. 第3図は国土交通省国土地理院発行のものを使用した。
8. 本書の執筆・遺物実測、校正等の報告書作成作業は宍道が行なった。
9. 本書に報告した出土遺物、実測図、写真等は、斐川町教育委員会で保管している。

# 目 次

序

例 言

目 次

挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と環境	2
第3章 調査の結果	4
第1節 第1調査区の概要	4
1. 調査の概要	4
2. 出土遺物	4
第2節 第2調査区の概要	8
1. 調査の概要	8
2. 遺 構	9
3. 出土遺物	11
第4章 まとめ	14

## 挿 図 目 次

- 第1図 佐利保谷遺跡調査地位置図
- 第2図 調査区配置図
- 第3図 佐利保谷遺跡と周辺の主な遺跡
- 第4図 土層図（上段：第1調査区東壁、下段：第2調査区東壁）
- 第5図 第1調査区平面図
- 第6図 第1調査区出土遺物実測図
- 第7図 第2調査区平面図
- 第8図 第2調査区遺構断面図（SD01～SD06、ピット）
- 第9図 第2調査区遺構面直上出土遺物実測図1
- 第10図 第2調査区遺構外出土遺物実測図2
- 第11図 第2調査区出土遺物実測図3
- 第12図 佐利保谷遺跡周辺の歴史的環境

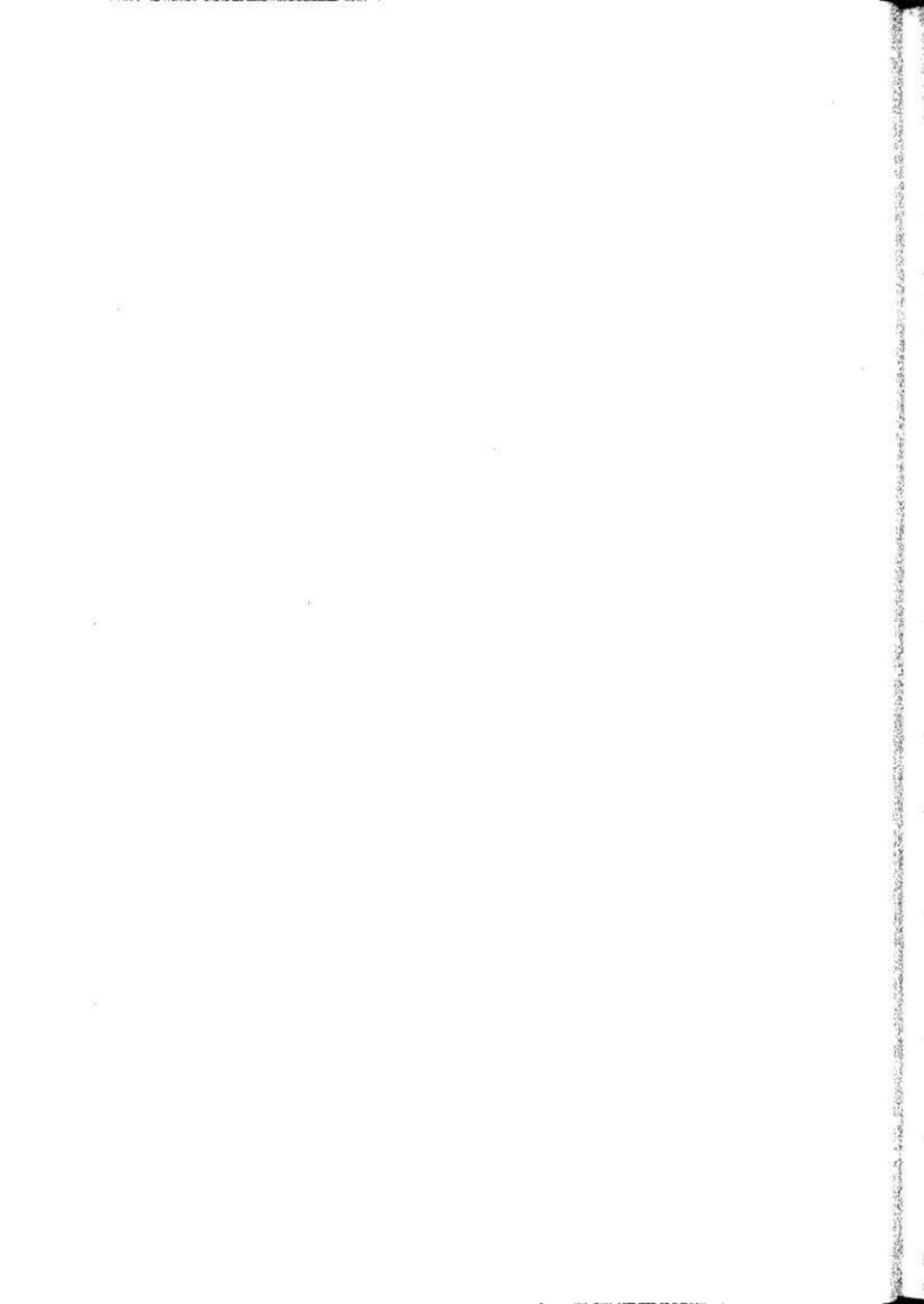
## 表 目 次

- 表1 第1調査区出土遺物（土器）観察表
- 表2 第2調査区遺構面直上出土遺物（土器）観察表
- 表3 第2調査区遺構外出土遺物（土器）観察表
- 表4 第2調査区出土遺物（石器）観察表
- 表5 第2調査区出土遺物（土製品）観察表

## 写真図版目次

- 図版1上 調査前全景 南より
- 図版1中 第1調査区 完掘状況 北より
- 図版1下 完掘状況 南より
- 図版2上 第1調査区 東壁
- 図版2中 東壁（北寄り）
- 図版2下 遺物出土状況（東壁面）

- 図版3上 第2調査区 遺構検出状況 南より  
図版3下 完掘状況 南より  
図版4上 第2調査区 遺構検出状況 北より  
図版4中 遺構検出状況 西より  
図版4下 SD01～SD05 完掘状況  
図版5上 SD01～SD03、SD06 完掘状況  
図版5中 SD02、SD03 完掘状況  
図版5下 SD04、SD05 完掘状況  
図版6上 SD01 第1セクション、SD04 第5セクション  
図版6中上 SD01 第2セクション、SD05 第6セクション  
図版6中下 SD02 第3セクション、SD06 第7セクション  
図版6下 SD03 第4セクション、ビット断面  
図版7上 第2調査区 東壁  
図版7中 東壁（北寄り）  
図版7下 遺物出土状況  
図版8上 第1調査区 出土遺物(1)  
図版8中 出土遺物(2)  
図版8下 出土遺物(3)  
図版9上 出土遺物(4)  
図版9中 出土遺物(5)  
図版9下 第2調査区 遺構面直上出土遺物(1)  
図版10上 出土遺物(2)  
図版10中 出土遺物(3)  
図版10下 出土遺物(4)  
図版11上 第2調査区 遺構外出土遺物(1)  
図版11中 出土遺物(2)  
図版11下 出土遺物(3)  
図版12上 出土遺物(4)  
図版12中 出土遺物(5)  
図版12下 出土遺物(6)  
図版13上 第2調査区 幾何学模様土器（左：内面、右：外面）  
図版13中 第2調査区 石器（左）、土製品（右）  
図版13下 光厳寺跡付近宝篋印塔（左）、東光寺跡付近宝篋印塔（右）



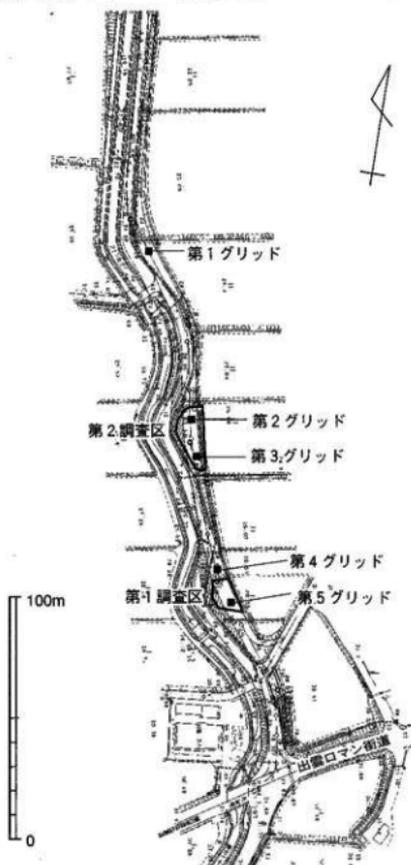
## 第1章 調査に至る経緯

鳥根県出雲農林振興センターは経営体育成整備事業の一環として以南東部地区の農道整備を計画した。同センターは計画地内の文化財調査について斐川町土木振興課同県事業推進室と協議し、同室は斐川町教育委員会へ文化財分布調査を依頼した。

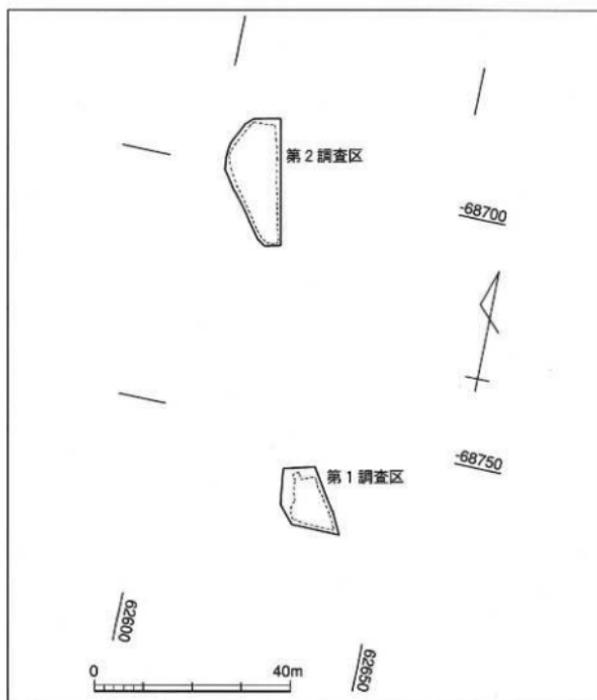
これを受け町教育委員会は遺跡の分布調査を行ない、計画地内には佐利保谷遺跡が存在するため開発にあたっては文化財保護法に基づく発掘調査が必要である旨を平成15年7月31日付け文書で回答した。これを受けセンターは同年9月24日に「平成15年度以南東部地区経営体育成基盤整備事業の実施に係る埋蔵文化財発掘調査」について協議を行なった結果、町教育委員会が発掘調査を行なうことで合意した。

調査は平成15年9月26日から翌年1月31日までの予定で行なわれ、当初は遺跡の範囲を探るために5ヶ所の試掘グリッドを設定した。結果、第1グリッドについては遺構・遺物ともに出土しなかったが、第2～第5グリッドについては若干の遺物が出土するとともに、第2、第4グリッドでは遺物包含層にあたる黒褐色土層が確認できた。これにより調査範囲を限定し、第4、第5グリッドを含む地区を第1調査区、第2、第3グリッドを含む地区を第2調査区とし、改めて本調査を実施することとした。なお、第4グリッドは周辺の調査可能範囲が狭く、本調査からは除外することにした。

本調査が進むにつれ遺構が予想以上に多く検出されたために調査期間と経費について同センターと協議した結果、平成16年1月26日付けで変更契約を行ない3月まで調査を継続し、報告書の作成については平成16年度に行なうこととした。



第1図 佐利保谷遺跡調査地位位置図(1:2,000)



第2図 調査区配置図 (1 : 1,000)

## 第2章 位置と環境

佐利保谷（さりほだに）遺跡は出雲平野の南部、標高 314 m の高瀬山から北へ派生する丘陵谷間の一つ、神庭谷の出口あたりに位置している。遺跡の現状は水田で、標高 28 m ほどになる。遺跡の北方 900 m には円墳としては県下で 9 番目の大きさとなる小丸子山古墳、丘陵を挟んで西方 380 m には大量の弥生青銅器が発見された荒神谷遺跡、南方 1,850 m には中世米原氏が居城した高瀬城跡（甲の丸）、東方 500 m には風土記社神代神社が所在している。

本遺跡の北方に拡がる広大な出雲平野は中世までは入海（古宍道湖）で、人々の生活はもっぱら南部丘陵地や縁辺部であったと考えられる。

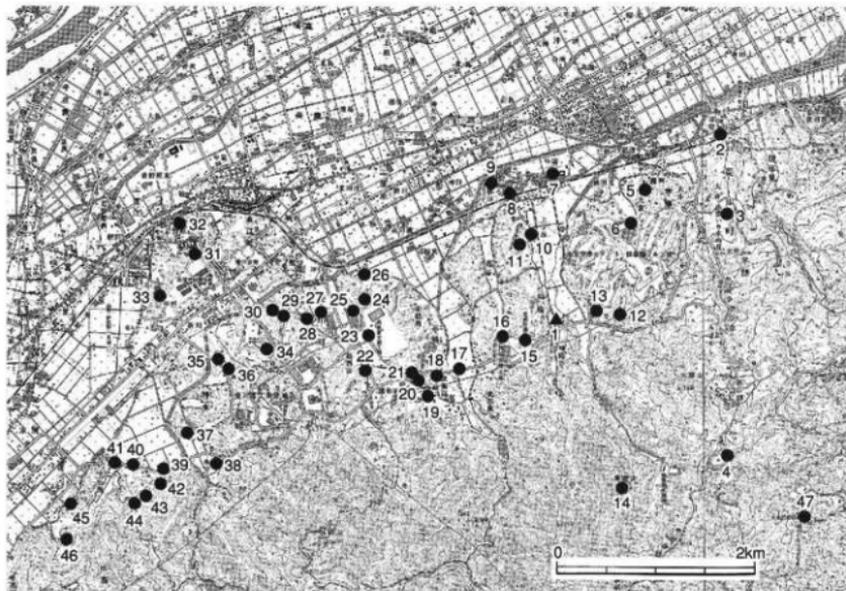
縄文時代の遺跡は直江・結遺跡や神氷・上ヶ谷遺跡、出西・後谷遺跡など谷あいの奥まったところや縁辺部で見つかっている。後谷遺跡は縄文時代晩期から弥生時代中頃にかけて継続的に営まれた拠点集落である。弥生時代中頃になって遺跡の数は増え、吉成・宮谷遺跡、学頭・大倉Ⅳ遺跡、直江・杉沢遺跡など丘陵斜面に住居を構えるようになる。と

くに宮谷遺跡は塩町式土器が含まれることから山陽地方との交流がうかがえる。後期末から古墳時代初めにかけては、神庭・西谷遺跡や出西・斐伊川鉄橋遺跡など沖積地からの遺物の発見もみられる。

町内では前期古墳は今のところ発見されていないが、中期には神庭岩船山古墳、学頭・軍原古墳、学頭・小丸子山古墳など大規模古墳が集中して築かれる。後期においては比較的小規模な石棺式石室をもつ古墳や平野横穴墓群に代表される横穴墓がいくつかの群をなして分布するようになる。

律令期になって『出雲国風土記』（733年）によると現斐伊川町は、健部・漆沼・出雲・河内・神戸の各郷里に区分される。本遺跡のあるあたりは健部郷で、風土記によると旧名が「宇夜里」であったことがわかる。その遺称が「宇屋谷」である。

中世に至って米原平内兵衛尉綱寛が居城していた高瀬城跡は尼子十旗の6番目に位置付けられ、周辺にも宇屋谷城跡や鷹の巣城跡などの居館、出城など高瀬城を守衛する関連遺跡が集中するところである。



- |           |          |           |           |             |
|-----------|----------|-----------|-----------|-------------|
| 1 佐利保谷遺跡  | 11 田中古墳群 | 21 石橋古墳群  | 31 平野横穴墓群 | 41 後谷遺跡     |
| 2 軍原古墳    | 12 鷹の巣城跡 | 22 結城古墳   | 32 羽野原古墳群 | 42 外ヶ市古墳    |
| 3 七日市古墳群  | 13 宇屋谷城跡 | 23 結古墳群   | 33 平野Ⅰ遺跡  | 43 長者原古墳群   |
| 4 新田郷Ⅰ遺跡  | 14 高瀬城跡  | 24 吉成古墳群  | 34 杉沢Ⅰ遺跡  | 44 長者原(舊)遺跡 |
| 5 大倉横穴墓群  | 15 荒神谷遺跡 | 25 黄船古墳   | 35 上ヶ谷遺跡  | 45 出西小丸古墳群  |
| 6 大倉Ⅱ遺跡   | 16 西谷遺跡  | 26 宮谷遺跡   | 36 三ヶ田遺跡  | 46 山の奥横穴墓群  |
| 7 神庭岩船山古墳 | 17 武部遺跡  | 27 八斗寺Ⅰ遺跡 | 37 城山古墳群  | 47 加茂岩倉遺跡   |
| 8 神庭丘北遺跡群 | 18 武部西遺跡 | 28 湯切瓦出土地 | 38 水原Ⅱ遺跡  |             |
| 9 御村山横穴墓群 | 19 武部西古墳 | 29 三井Ⅱ遺跡  | 39 小野遺跡   |             |
| 10 小丸子山古墳 | 20 西古墳群  | 30 杉沢Ⅱ遺跡  | 40 壱城遺跡   |             |

第3図 佐利保谷遺跡と周辺の主な遺跡

## 第3章 調査の結果

### 第1節 第1調査区の概要

#### 1. 調査の概要

本調査区は従来知られていた佐利保谷遺跡の北端にあたり、簸川南地区広域農道（現・出雲ロマン街道）の北70mの水田に位置する。調査範囲は南北長14.5m、東西幅9mを測り、南側がやや狭くなる台形状を呈している。調査面積は110㎡となる。

調査は試掘第4グリッド及び第5グリッドの上層を参考に、初めは重機により水田耕作土から床土、さらに北側は2層暗灰色土や3層灰色土、南側は12層暗灰褐色土まで掘削した。これらの層は昭和40年代に行なわれた土地改良時の盛土と考えられ、軟弱な土の中に地山ブロックや須恵器、陶磁器などが混入している。さらに人力で掘削を進めると、調査区の中程から南側で拳大から人頭大の礫を多く含む青灰色の礫層にあたり、南側は水田下30cm、北側は60cmで北に向かって低くなる堆積をしている。礫層を部分的に掘り下げた結果、これより下層は遺物も遺構も存在しないいわゆる地山と判断した。上流からの大規模な土石流により堆積した層であろうと思われる。

礫層において明確に遺構を検出することはできなかったが、調査区北東隅では、この礫層の上、水田下1.7mで土器を多量に含む7層黒褐色土、8層淡青灰色砂質土、10層黒色土などが堆積し、遺構は認められなかったが、調査区の北及び東方向に住居跡などの遺構が存在する可能性を残すものである。

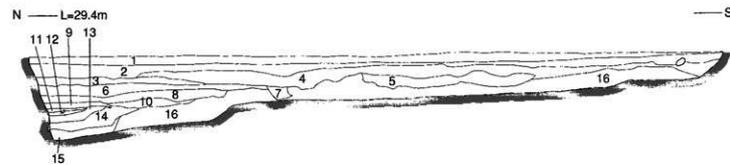
また調査区の北西側は礫層が急激に下がる地形となっており、すぐ西に隣接する現道（町道1469号線・幅員3m）のさらに西に流れる新石川（川幅4m、深さ2～3m）に向けて落ち込む堆積状況である。おそらく、新石川は古代から低い谷地形のところを流れていたものと想定される。（第4図上段、第5図）

#### 2. 出土遺物

出土した遺物は、小片も含めると約500片で、須恵器や陶磁器、製塩土器などが認められる。

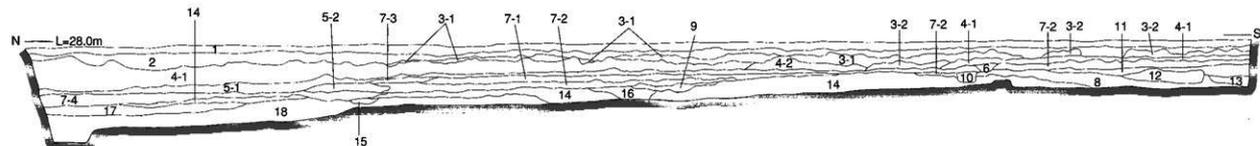
第6図1～9は須恵器である。1は口縁部が欠損しているが輪状つまみが付く蓋、2は口縁部が垂下する蓋で、復元口径16.2cmを測る。3は口径18.4cmの坏である。4は坏か壺かと思われる底部で、外面に自然釉が付着している。5、6は坏の底部で、ともに回転糸切り痕がかすかに残されている。9は平らな底部をもつ長頸壺であろうか。器壁が厚く、外面に回転糸切り痕が認められる。7、8は甕の口頸部と胴部で、同一個体と思われる。7は単純口縁で、口径10cmを測る。内外面ともタキ痕が明瞭に残る。以上、これらの須恵器は、奈良～平安時代の所産と考えられる。

第6図10は中世陶器で、肥前系甕の口頸部である。11～15は製塩土器である。いず



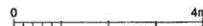
第1調査区層名

- 1 耕作土
- 2 灰褐色土 (床土)
- 3 暗灰色土
- 4 暗灰褐色土 (2層に類似)
- 5 暗青灰色土 (攪乱)
- 6 灰色土
- 7 灰色土 (攪乱)
- 8 緑灰色土 (砂質土多い)
- 9 緑灰色砂礫土
- 10 緑灰色砂礫土 (9層に類似、暗灰色砂質土多い)
- 11 暗灰色砂質土 (小礫混じり)
- 12 黒色土 (上面で須恵器出土)
- 13 黒褐色土 (土器出土)
- 14 淡青灰色砂質土 (土器多く出土)
- 15 淡青灰色砂礫土
- 16 青灰色礫土 (地山)



第2調査区層名

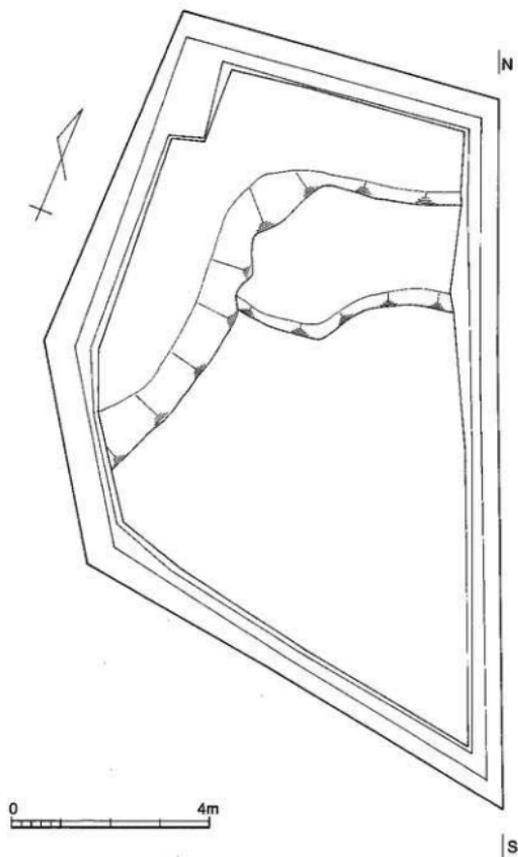
- |                    |                              |
|--------------------|------------------------------|
| 1 耕作土              | 8 黒色土 (小礫含む)                 |
| 2 灰褐色土 (床土)        | 9 黒灰色砂質土 (礫含む)               |
| 3-1 暗灰褐色土          | 10 暗灰色土 (小礫含む)               |
| -2 暗灰褐色土 (3-1層に類似) | 11 青灰色礫土                     |
| 4-1 茶褐色土 (盛土)      | 12 灰褐色砂質土 (細砂)               |
| -2 茶褐色土 (4-1層に類似)  | 13 灰褐色砂質土 (黒色土混じる)           |
| 5-1 暗灰色土           | 14 青灰色礫土 (地山)                |
| -2 暗灰色土 (やや薄い)     | 15 暗灰褐色土 (小礫含む) (地山)         |
| 6 灰色粘質土 (攪乱か)      | 16 黒灰色砂質土                    |
| 7-1 灰色土 (炭化物少量含む)  | 17 青灰色砂質土 (地山)               |
| -2 灰色土 (やや薄い)      | 18 淡青灰色砂質土 (17層との境に礫含む) (地山) |
| -3 灰色土 (やや薄い、小礫含む) |                              |
| -4 灰色土 (小礫多く含む)    |                              |



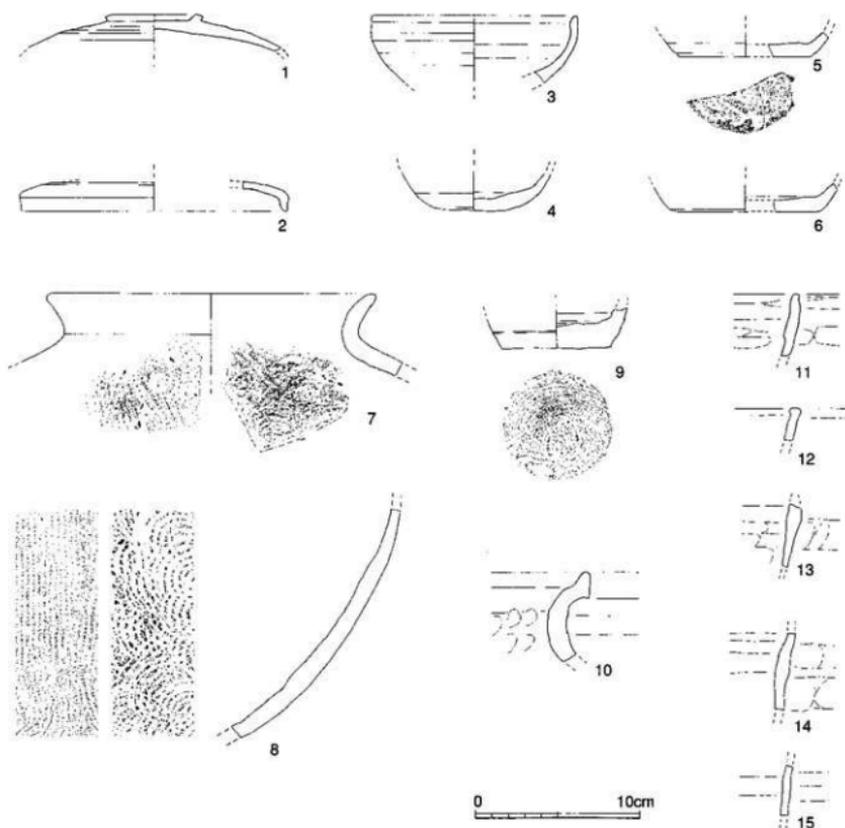
第4図 土層図 (1:80)

(上段:第1調査区東壁、下段:第2調査区東壁)

れも小片のため口径等を計測することはできない。11の口縁端部は外方にやや肥厚し、12は平坦である。15以外は外面に指圧痕、内面に強い横ナア痕がみられ、橙色を呈す。すべて底部を欠いているが、砲弾状を呈する器形と思われ、奈良～平安時代にかけての六連式の焼塩土器と考えられる。この他、図化し得ないが10片ほどの破片が認められた。



第5図 第1調査区平面図(1:100)



第6図 第1調査区出土遺物実測図(1:3)

## 第2節 第2調査区の概要

### 1. 調査の概要

本調査区は第1調査区の北側45mのやはり水田に位置する。調査範囲は南北長26m、東西幅12mを測り、南側はやや狭くなり、北側は膨らむ形となっている。調査面積は220㎡となる。

調査は試掘第2グリッド及び第3グリッドの土層を参考に、第1調査区と同様重機により水田耕作土から床上、さらに土地改良時による盛土である3層茶褐色土や9層暗灰褐色土などを掘削した。地山は第1調査区と類似した青灰色の礫層であるが第1調査区で認められた層より礫は小さく比較的しっかりと安定した地山面をしている。この地山は調査区中程から南側では14層青灰色礫土が主体であるが、北寄りでは17層青灰色砂

質土や18層淡青灰色砂質土が厚く堆積し、やや軟質な土層となっている。水田面から地山面までの深さは、南側で70cm、北側で120cmとなり、北に向かって緩く傾斜している。(第4図下段)

## 2. 遺構

遺構は地山面で溝状遺構6条、小ピット1穴が検出された。(第7図、第8図)

### SD01

調査区の西寄りで見出された南北に長い溝状遺構である。南北長14.7mを測り、やや弧状を呈している。溝の南端は丸い形状をし、北側は調査区外に延びている。溝は第1セクションでは幅65cm、深さ20cmを測り、西側が深くなるすり鉢状を呈している。第2セクションでは幅40cm、深さ11cmを測り、すり鉢状を呈している。溝内からは古墳時代後期の須恵器壺片など8点が出土した。

### SD02・SD03

SD01の東に位置し、東西に延びる溝状遺構である。両溝は東寄りで合流し調査区外へ続いている。SD02は北側の溝で、東西長7.35m、第3セクションでは溝幅44cm、深さ12cmを測り、中程が深くなる2段状を呈している。主軸方向はN27°Eを測る。SD03は南側の溝で、第4セクションでは溝幅53cm、深さ8cmを測り、箱状を呈している。主軸方向はN61°Eを測る。両溝合流地点から東は長さ1.9m、幅1.3cmを測る。SD02溝内からは須恵器片1点、土師器片2点、SD03溝内からは須恵器片4点、土師器片1点が出土した。

### SD04

調査区の南寄りで見出された南北方向の溝状遺構である。南北長4.5mを測り直線的で、北側が丸くおさまり、南側はSD05に接している。溝は第5セクションでは幅50cm、深さ10cmを測り、すり鉢状を呈しているが、部分的に砂質土が混じった落ち込みが認められる。主軸方向はN14°Wを測る。

### SD05

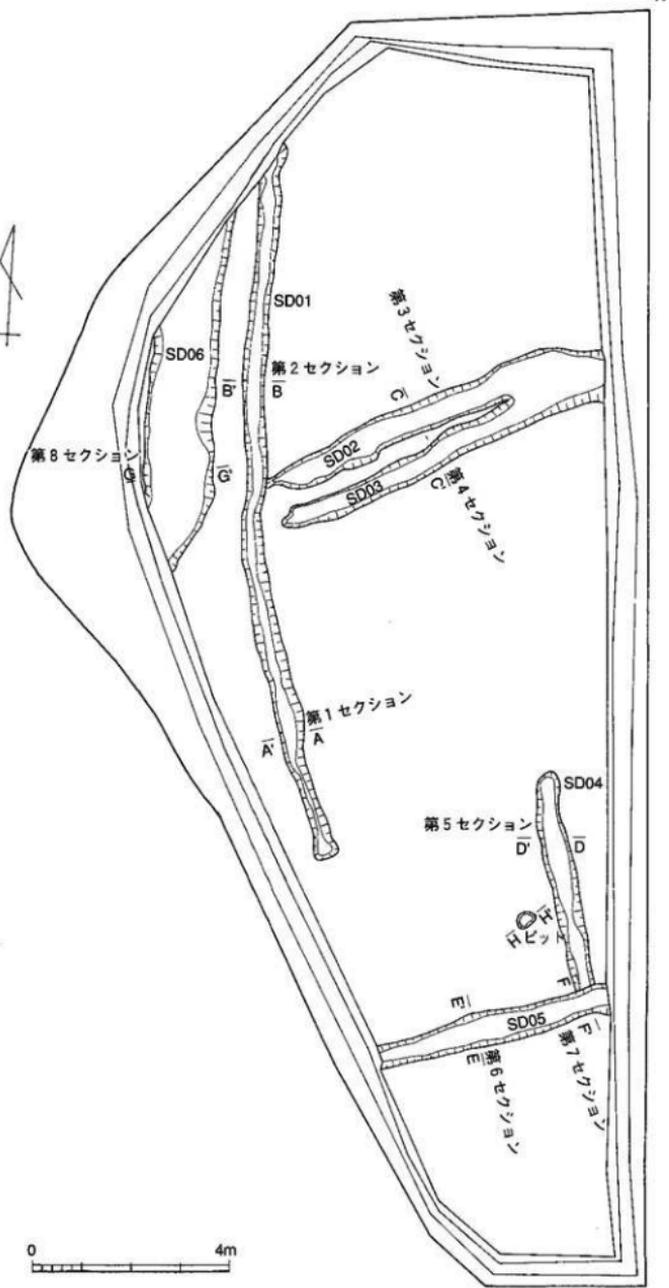
SD04の南に直行するように東西に延びる溝状遺構である。東西長4.75mを測るが、東側西側とも調査区外に続いている。SD04との切りあい関係は確認できなかった。溝は第6セクションでは幅70cm、深さ20cmを測り、北側が深くなる2段状を呈している。第7セクションでは幅43cm、深さ12cmを測り、箱状を呈している。主軸方向はN61°Eを測る。

### SD06

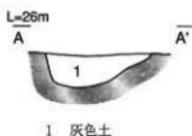
調査区の西寄りで見出されたSD01の西側に平行する溝状遺構である。南北長7.1mを測るが、北側、南側ともに調査区外に延び、他の溝より幅広である。溝幅は第8セクションでは155cm、深さ13cmを測り、すり鉢状を呈している。

### 小ピット

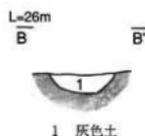
SD04の西側に位置する。径40cm、深さ10cmを測り、ピット底は先細りとなっている。対になるピットは未検出で、性格等も不明である。



第7図 第2調査区平面図 (1 : 100)



SD01 第1セクション



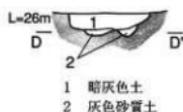
SD01 第2セクション



SD02 第3セクション



SD03 第4セクション



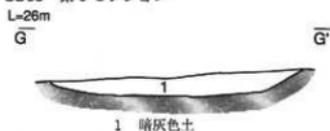
SD04 第5セクション



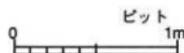
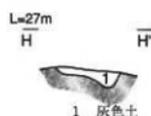
SD05 第6セクション



SD05 第7セクション



SD06 第8セクション

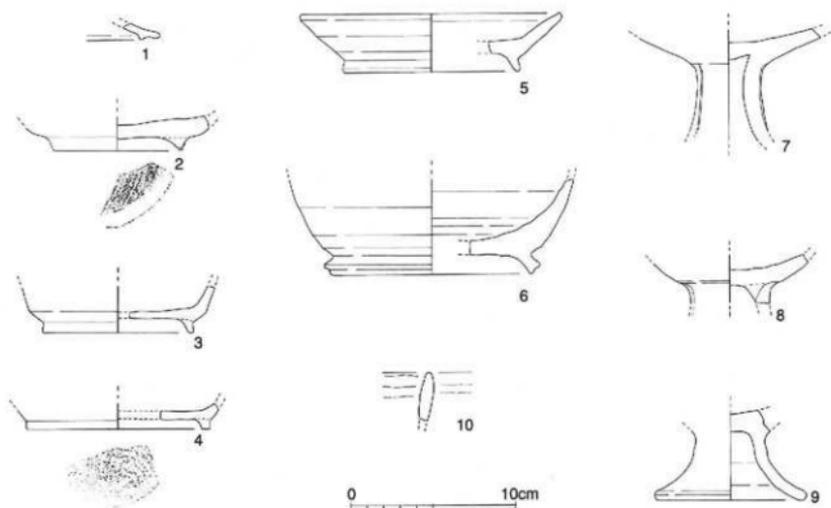


第8図 第2調査区遺構断面図 (1:30) (SD01~SD06、ピット)

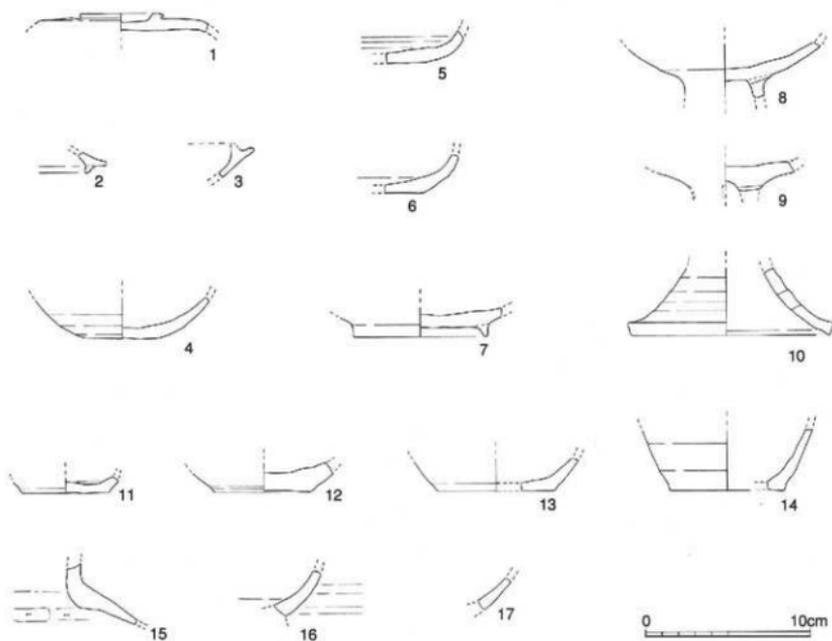
### 3. 出土遺物

出土した遺物はすべて破片で約1,060片が数えられ、須恵器のほか土師質土器、製塩土器などが認められる。

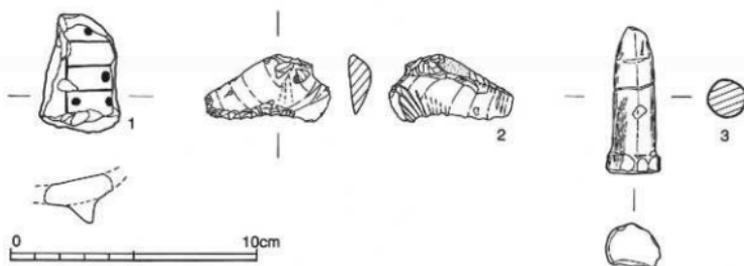
第9図は遺構面直上から出土した遺物である。1~9は須恵器である。1は内面にかえりを有する蓋である。2~4はいずれも高台を有する坏である。2は比較的厚い底部に三角形の高台、3は細く外方に延びる高台、4は低く角張った高台をもっている。2、4の底部は回転糸切り痕がみられる。底径は4が最も大きく、復元径11cmを測る。5は高台を有する皿で、厚い底部からハの字状に開く口縁である。口径は15.6cmを測る。6は壺の胴部から底部にかけてである。しっかりとしたハの字状に開く高台の径は



第9图 第2調査区遺構面直上出土遺物実測図1 (1:3)



第10图 第2調査区遺構外出土遺物実測図2 (1:3)



第11図 第2調査区出土遺物実測図3 (1:2)

12cmを測る。内面は暗灰色、外面は灰色を呈する。7～9は高坏である。7、8は脚部に2方向の透かしが施される。これらの須恵器のうち、1、7～9は古墳時代後期、2～6は奈良～平安時代に属するものと考えられる。

第9図10は製塩土器で、口縁端部は細くなるもので、胴部下半は欠けているが砲弾状を呈するものと思われる。

第10図は遺構外出土遺物である。1～10は須恵器である。1、2は蓋で、1は輪状つまみが付き、2は内面にかえりを有する。3～7は坏で、3は立ち上がり有し、4は底部が丸くなるものである。6の底部には回転糸切り痕がみられる。7は高台を有する坏である。8～10は高坏である。8、10は2方向、9は3方向の透かしを有している。10の底部は11.9cmを測り、大きくハの字状に開くものである。これらの須恵器は2～4、8～10が古墳時代後期、1、5～7は奈良時代に属するものであろう。

第11図15は土師器甕の頸部である。11～14は土師質土器で、11、12は皿形、13は坏形、14は椀形を呈する。11の底径は5.4cmと小形で、底部に回転糸切り痕をわずかに残す。16、17は12～13世紀の白磁碗である。

第11図1は内面に幾何学的な模様を描いた須恵器の高台を有する坏である。高台はハの字状に開き、断面三角形を呈している。坏部内面には縦横に5本の直線で4区画され、中に1+0+1+2個の●印が描かれている。この模様は薄い墨のように見えるが赤外線撮影を試みたが写らないので材料をにわかには特定することはできない。模様の意味については呪符や護符、まじないなどが想像されるが今のところ真意は不明と言わざるを得ず、今後の類例を待って検討していきたい<sup>(1)</sup>。

第11図2は黒曜石製のスクレーパーで、つまみを付けようとする意図がみられる。<sup>(2)</sup> 3は砲弾状の土製品で、何らかの鋳型の内型ではないかと思われる。

(註)

- (1) 幾何学模様土器については、水野正好氏、高島英之氏から有益なご教示をいただいた。しかし、今のところ類例がなく、今後さらに調査、分析を続けていくことにしたい。
- (2) 黒曜石については、丹羽野裕氏からご教示を得た。

## 第4章 まとめ

佐利保谷遺跡は中世米原氏が居城していた高瀬城跡のちょうど北からの進入路、のど仏にあたる位置に所在している。当時の大手前は宇屋谷入り口なのか神庭谷入り口なのか城の諸施設をどのように考えるかによって意見が分かれるところだが、守衛する方にとっては重要且つ象徴的な場所ではなかったかと思われる。宇屋谷には標高133mの権現山の頂上に見張り台の役割をしたであろう鷹の巣城跡や、その北西裾には土塁を廻らし郭や空堀を伴う居館宇屋谷城跡があるなど防衛とともに、平常時の生活空間があった地域である。また神庭谷の福島豊氏(屋号廻)や白根敏男氏(屋号佐賀利)、宇屋谷の石郡幸男氏(屋号前賀市)のそれぞれの宅地付近には宝篋印塔や五輪塔が残るなど戦乱の痕跡がみとめられる。そこには、旧西念寺、光厳寺、東光寺の寺跡も知られている。<sup>(1)</sup> それだけに今回の調査では、主に中世期の遺構や遺物の出土がみられるものと考えていたが、結果的には中世のものはごくわずかで大半は古墳時代から平安時代にかけての古代のものであった。

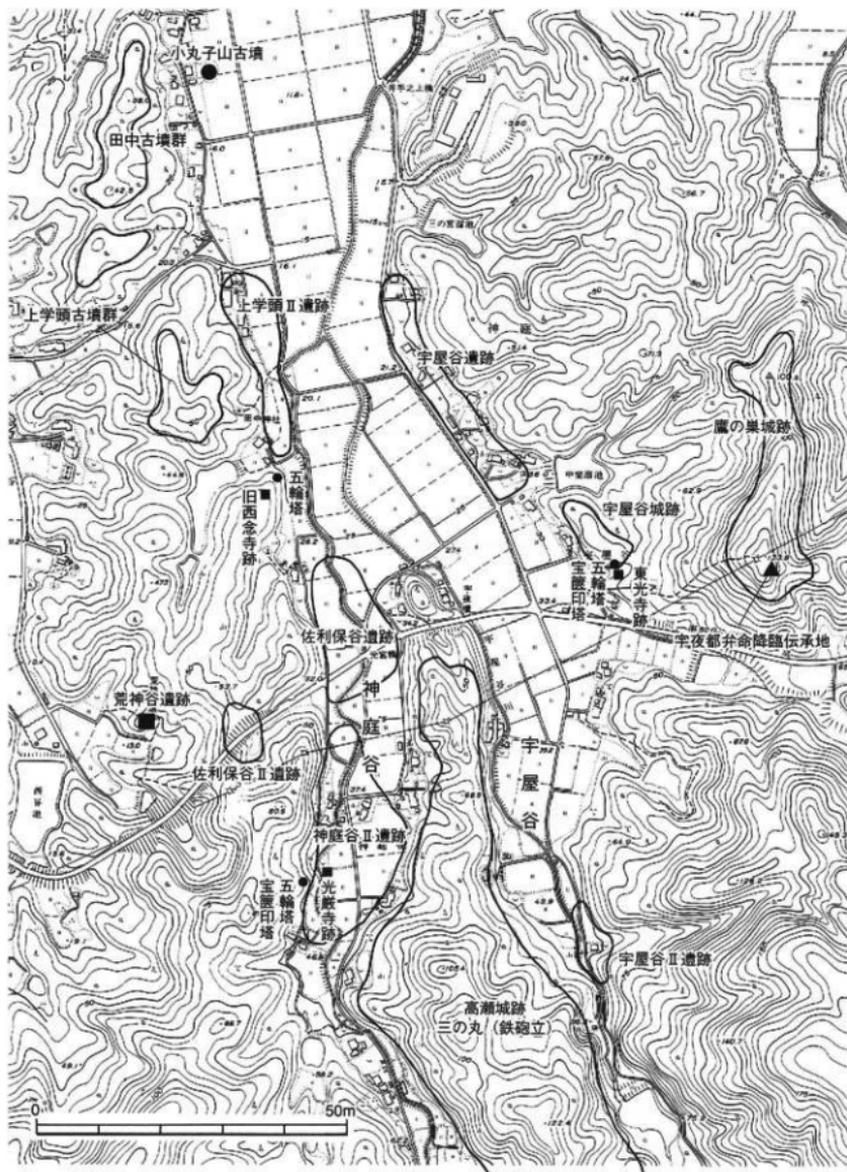
調査の結果、第2調査区で検出された溝状遺構6条は、古墳時代後期の溝と考えられた。東西方向に走る溝3条(SD02,SD03,SD05)と南北方向に走る溝3条(SD01,SD04,SD06)とがある。SD03とSD05とは比高差40cmほどあるが東西方向に平行して走る。溝間の距離は約10.5mの空間があり、建物遺構などの明確な施設は検出できなかったが、SD05に直行して北へ延びるSD04や小ピットが認められた。これらの遺構はSD02も含め何らかの区画的な溝ではないかと考えられる。また、SD01は若干弧状をえがき西隣のSD06とほぼ平行して走っている。SD06の西側6mには古代からの谷地形で自然河川であったらうと考える新石川が流れ、建物遺構が確認されていない現状では想像の域をでないが、このSD01とSD06とは集落の西側を取り巻く或いは限る溝で、SD02～SD05は集落内の幾分かの区画性をもった溝の一部とは考えられないだろう。

注目される遺物としては、町内ではあまり出土例をみない製塩土器があげられる。いずれも胴下半部を欠いているが砲弾状となる器形で、奈良～平安時代に製作された六連式のものであろう。出雲平野では大社町の鹿蔵山遺跡や中分貝塚、出雲市の上長浜貝塚など10数箇所の出土例があり、おもに「出雲国風土記」に記される「神門水海」近辺の遺跡で生産され、本遺跡のような集落にもたらされ消費されたのではないかと考えられる。<sup>(2)</sup>

以上、遺構と遺物の状況から若干の検討を行ってきたが、調査範囲が限られているため今の時点で全容を把握することは不可能である。今後は周辺の調査を待って神庭谷・宇屋谷地域の歴史を解明することができればと期待している。

### (註)

- (1) 寺跡や五輪塔等の所在については、神庭谷の白根敏男氏からご教示を得た。池田彦助著『斐川町東南部に於ける穴道瀧打紙並に莊原新田学類今昔物語』1983年
- (2) 製塩土器については、内田律雄氏、石原聡氏からご助言を賜った。内田律雄「鳥取県・鳥根縣」(近藤義郎編『日本土器製塩研究』青木書店 1994年



第12図 佐利保谷遺跡周辺の歴史的環境

表1 第1調査区出土遺物(土器)観察表

発掘番号	種別	器種	寸法 (cm)			胎土	焼成	色調	調査	備考
			口徑	底徑	器高					
6-1	須恵器	蓋				1mm以下の砂粒を含む	良好	暗灰色	外面：ヘラ削り縁取ナア 内面：回転ナア	輪状つまみ
6-2	須恵器	蓋	(16.2)			1mm以下の砂粒を含む	良好	暗灰色	外面：ヘラ削り 内面：回転ナア	
6-3	須恵器	杯	(18.4)			1mm以下の砂粒を含む	やや不良	暗灰色	外面：回転ナア 内面：回転ナア	
6-4	須恵器	杯(少量)				2mm以下の砂粒を含む	良好	灰色	外面：回転ナア 内面：回転ナア	底部
6-5	須恵器	杯		(8.0)		密	良好	淡灰色	内外面：回転ナア 底部外面：回転糸切り	
6-6	須恵器	杯		(9.0)		密	やや不良	淡灰色	内外面：回転のため不明 底部外面：回転糸切り	
6-9	須恵器	壺		6.65		2mm以下の砂粒を含む	良好	内：灰色 外：暗灰色	内外面：回転ナア 底部外面：回転糸切り	底部
6-7	須恵器	壺	(10.0)			1mm以下の砂粒を含む	良好	暗灰色	口縁内外面：回転ナア	
6-8	須恵器	壺				密	良好	内面：灰色 外面：暗灰色		胴部外面：平行タタキ直 胴部内面：凹形内て具痕
6-11	土師器	製塩土器				密	普通	褐色	内外面：掘込板	六通式
6-12	土師器	製塩土器				密	普通	褐色	内外面：掘込板	六通式
6-13	土師器	製塩土器				密	普通	淡褐色	内面：横ナア 外面：掘込板	六通式
6-14	土師器	製塩土器				密	普通	赤褐色	内面：横ナア 外面：掘込板	六通式
6-15	土師器	製塩土器				密	普通	褐色	内面：横ナア 外面：掘込板	六通式
6-10	陶器	壺				0.5mm以下の砂粒を含む	良好	赤系褐色	胴部内面：掘込板 口縁内外面：回転ナア	

※ ( )内の数字は推定

表2 第2調査区遺構面直上出土遺物(土器)観察表

発掘番号	種別	器種	寸法 (cm)			胎土	焼成	色調	調査	備考
			口徑	底徑	器高					
9-1	須恵器	蓋				密	良好	内面：灰色 外面：暗灰色	内外面：回転ナア	かよりを有す
9-2	須恵器	杯		(10.0)		1mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰色	内外面：回転ナア 底部外面：回転糸切り	高台付(断面：三角形)
9-3	須恵器	杯		9.0		1mm以下の砂粒を多く含む	良好	暗灰色	内外面：回転ナア	高台付
9-4	須恵器	杯		(11.0)		0.5mm以上の砂粒を多く含む	良好	灰色	内外面：回転ナア 底部外面：回転糸切り	高台付(断面：尖頭形)
9-5	須恵器	皿	(15.6)	(10.5)	3.5	0.5mm以上の砂粒を多く含む	良好	暗灰色	内外面：回転ナア	高台付
9-6	須恵器	壺		(12.0)		2.3mm以下の砂粒を多く含む	良好	内面：暗灰色 外面：灰色	内外面：回転ナア 胴下半部：ヘラ削り	高台付
9-7	須恵器	高杯				密	良好	灰色	内外面：回転ナア	縁取の遺し2方向
9-8	須恵器	高杯				1mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰色	内外面：回転ナア	縁取の遺し2方向
9-9	須恵器	高杯		9.2		1mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰色	内外面：回転ナア	
9-10	土師器	製塩土器				密	良好	褐色	外面：磨耗のため不明 内面：横ナア	六通式

※ ( )内の数字は推定

表3 第2調査区遺構外出土遺物(土器)観察表

検出番号	種別	図柄	法量 (cm)			胎上	焼成	色調	調整	備考
			口径	底径	器高					
10-1	須臾器	蓋				0.5mm以下の砂粒を含む	良好	緑灰色	内外面: 回転ナデ 大舟部外面: ヘタ削り	輪状つまみ
10-2	須臾器	蓋				0.5mm以下の砂粒を含む	良好	灰色	内外面: 回転ナデ	かえり有す
10-3	須臾器	杯				1mm以下の砂粒を含む	良好	灰色	内外面: 回転ナデ	立ち上がり有す
10-4	須臾器	杯・蓋				1mm以下の砂粒を含む	良好	内: 緑灰色 外: 灰色	内面: 回転ナデ 外面: ヘタ削りナデ	
10-5	須臾器	杯				1mm以下の砂粒を含む	良好	内面: 灰色 外面: 赤茶色	内外面: 回転ナデ	
10-6	須臾器	杯				0.5mm以下の砂粒を含む	良好	灰色	内外面: 回転ナデ 底部外面: 縦いナデ	
10-7	須臾器	杯	(5.0)			0.5mm以下の砂粒を含む	良好	灰色	内外面: 回転ナデ 底部外面: 縦いナデ	高台付
10-8	須臾器	高杯				1mm以下の砂粒を含む	良好	内面: 灰色 外面: 赤茶色	内外面: 回転ナデ	透し有り
10-10	須臾器	高杯	(11.9)			1mm以下の砂粒を含む	良好	内面: 灰色 外面: 赤茶色	内外面: 回転ナデ	透し有り
10-11 2	土師瓦上器	皿		5.4		0.5mm以下の砂粒を含む	良好	黄褐色	内面: ナデ 外面: 回転ナデ	
10-12 3	土師瓦上器	杯		5.7		0.5mm以下の砂粒を含む	良好	内面: 淡赤色 外面: 淡黄赤	内面: ナデ、ロクロ痕 外面: ナデ 底部外面: 回転ナデ	
10-13 4	土師瓦上器	杯		(7.1)		1mm以下の砂粒を含む	良好	赤紫色	器底のため不明	
10-14 5	土師瓦上器	碗		(3.8)		密(砂粒を少量含む)	良好	黄褐色	内外面: 回転ナデ 外面: ナデ 底部外面: 回転ナデ	胴下半部外面: 黒色
10-15 1	土師器	蓋				1mm以下の砂粒を含む	良好	赤褐色	内外面: ナデ 製成内面: ケズリ	
10-16	陶器	碗				密	良好	乳白色	体部下半外面: 回転ナデ	白磁
10-17	陶器	碗				密	良好	乳白色		白磁
10-18	須臾器	高杯				0.5mm以下の砂粒を含む	良好	灰色	内外面: 回転ナデ	軸線の透し3方向
11-1	須臾器	杯				密	良好	灰色	内外面: 回転ナデ	高台付(断面: 三角形) 内面に直線と●印が透かされている 長さ: 6.9cm、径: 3.3cm

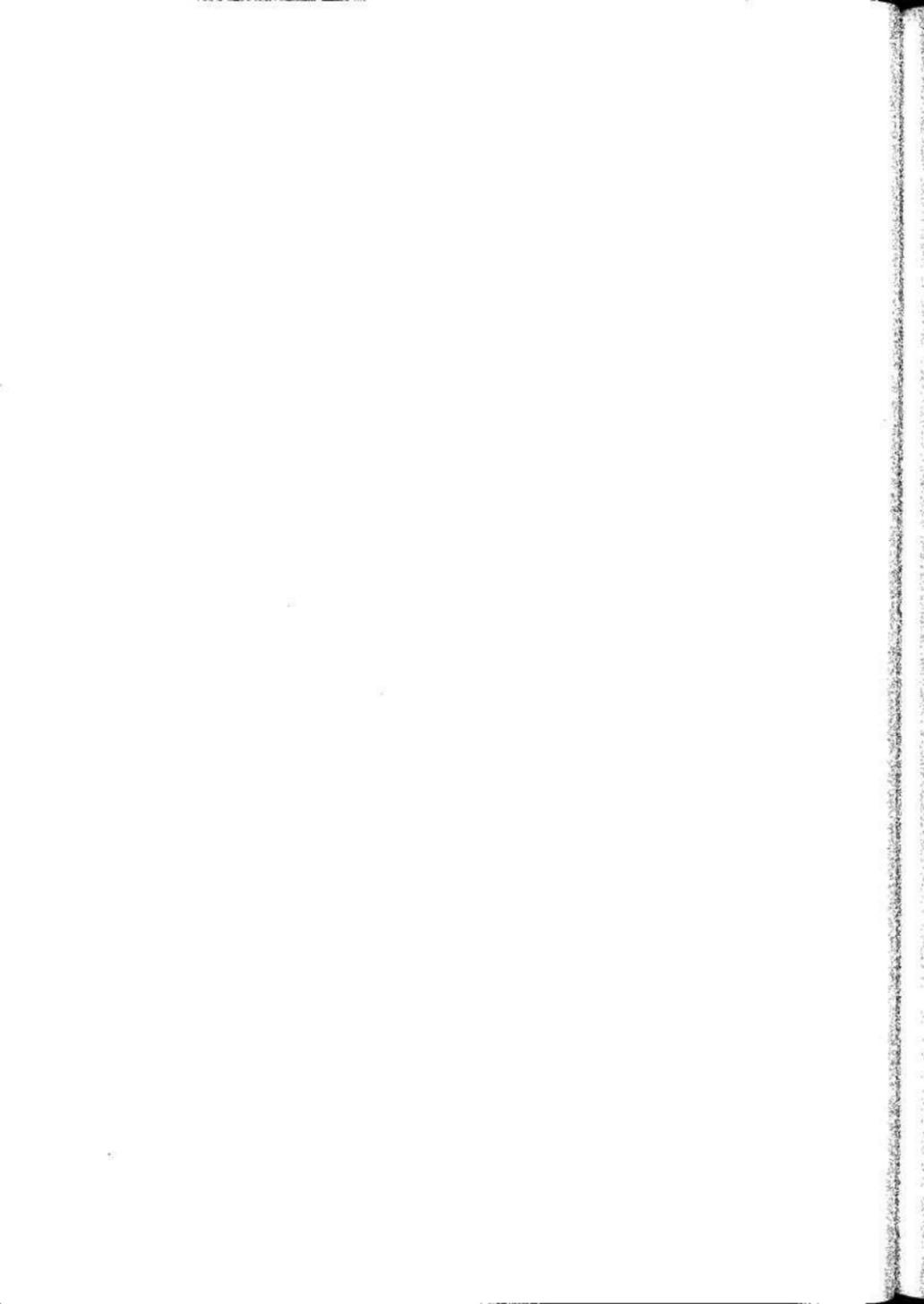
● ( ) 内の数字は測定

表4 第2調査区出土遺物(石器)観察表

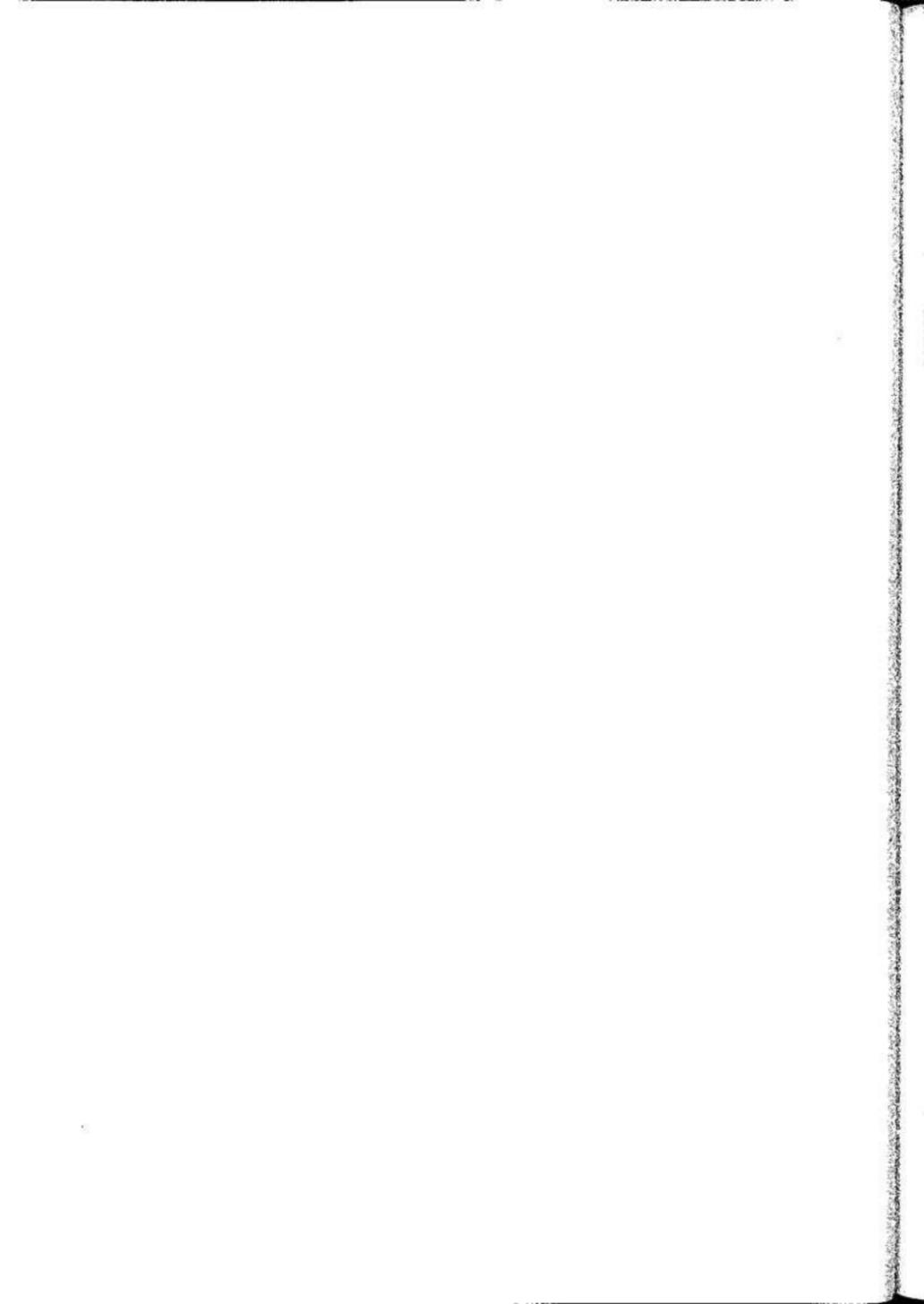
検出番号	種別	材質	法量 (cm, g)				備考
			最大長	最大幅	最大厚	重量	
11-2	スクレーパー	黒曜石	5.1	2.5	0.9	0.59	つまみ部欠損か

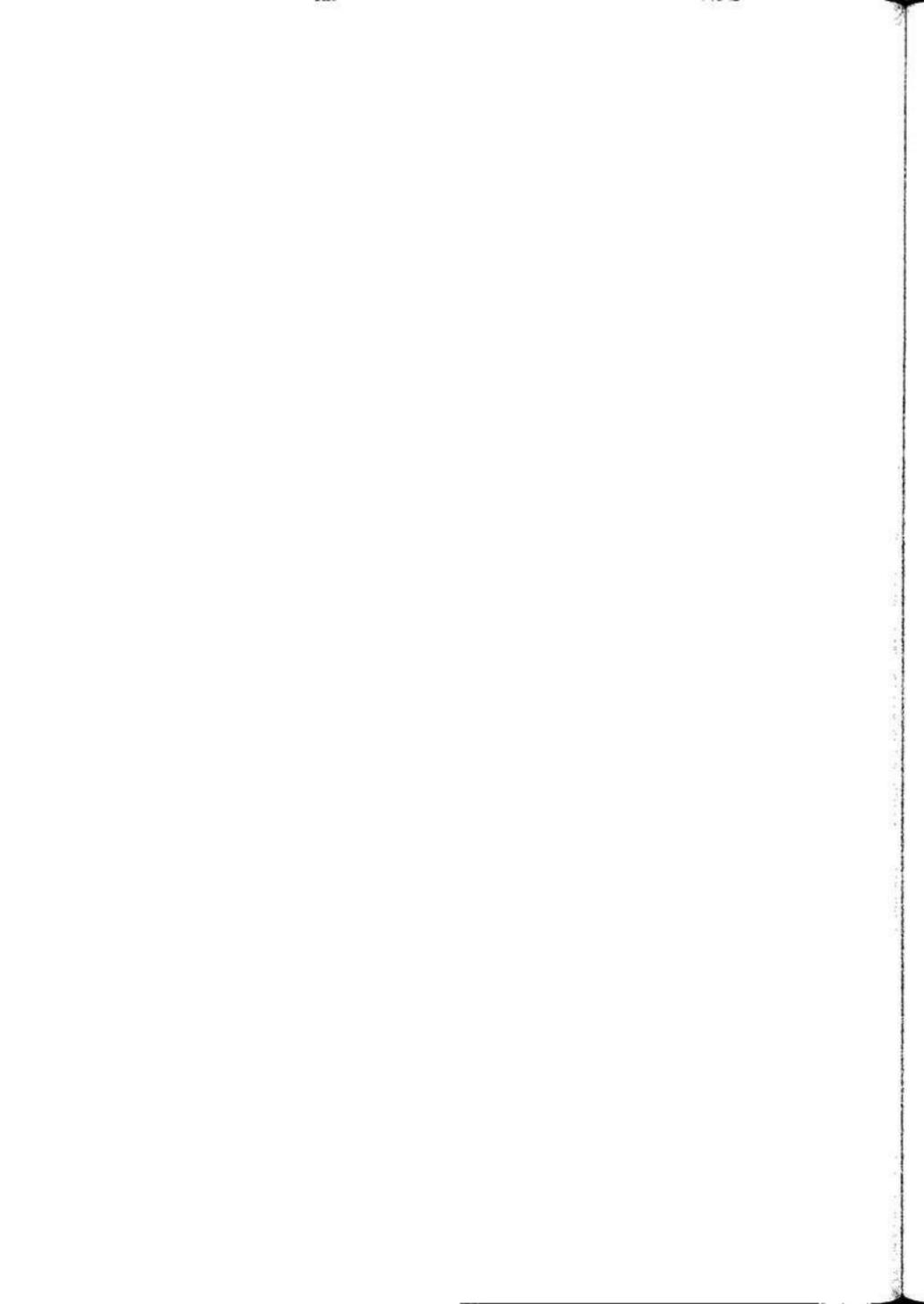
表5 第2調査区出土遺物(土製品)観察表

検出番号	種別	法量 (cm, g)				胎上	色調	備考
		最大長	最大径	巻部径	重量			
11-3	銅製小	6	1.7	2.2	4.8	密	にぶい橙色	内周小



# 写真図版







調査前全景 南より



第1調査区  
完掘状況 北より



完掘状況 南より



第1調査区 東壁



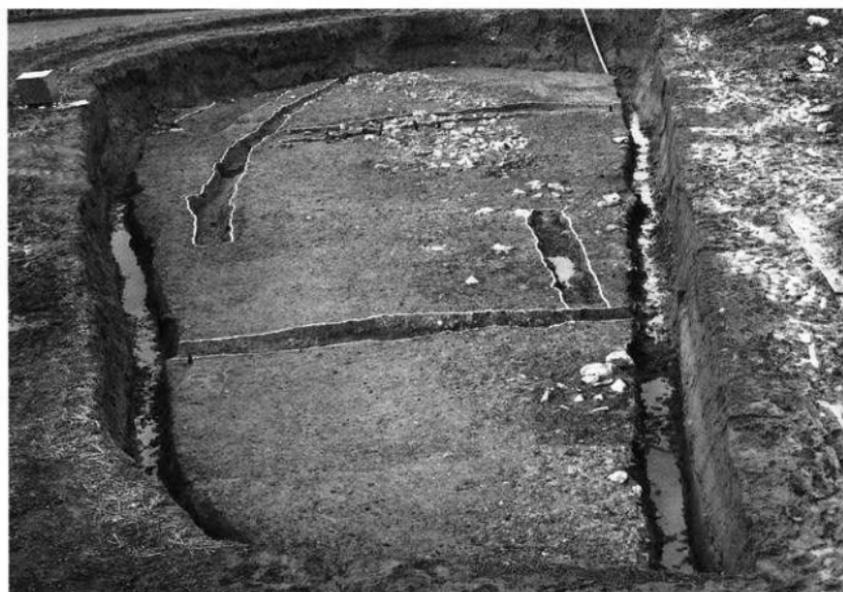
東壁（北寄り）



遺物出土状況(東壁面)



第2調査区 遺構検出状況 南より



完掘状況 南より

図版 4



第2調査区  
道構検出状況 北より



道構検出状況 西より

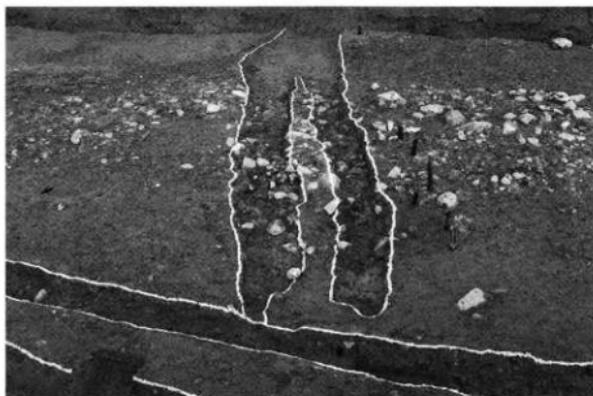


SD01～SD05  
完掘状況

SD01~SD03、SD06  
完掘状況



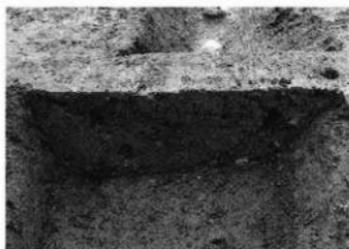
SD02、SD03  
完掘状況



SD04、SD05  
完掘状況



図版 6



SD01 第1セクション



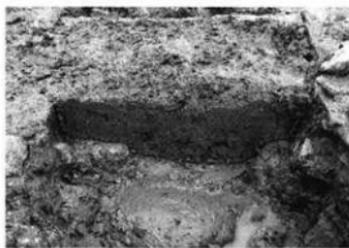
SD04 第5セクション



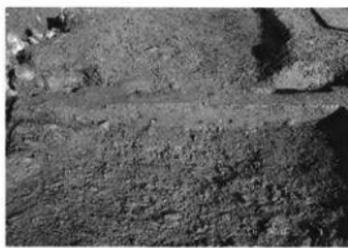
SD01 第2セクション



SD05 第6セクション



SD02 第3セクション



SD06 第7セクション

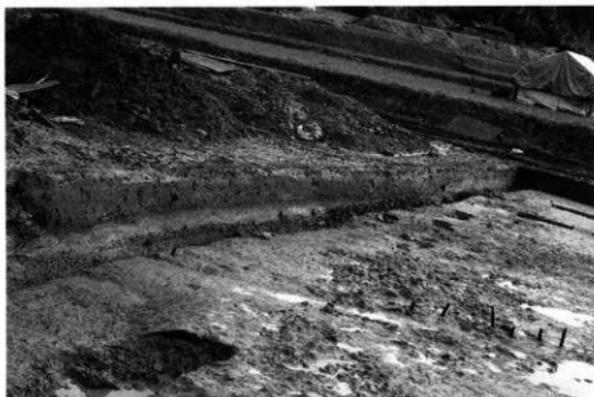


SD03 第4セクション



ピット断面

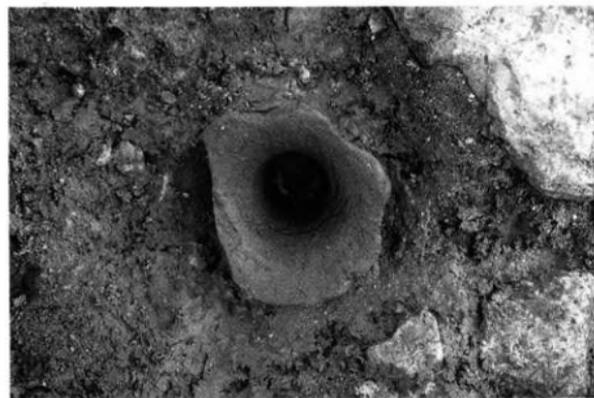
第2調査区 東壁

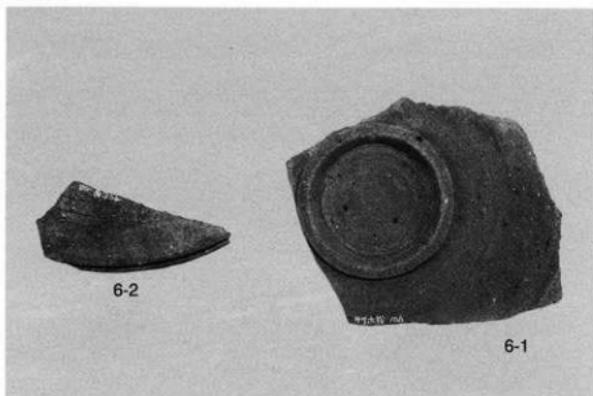


東壁（北寄り）

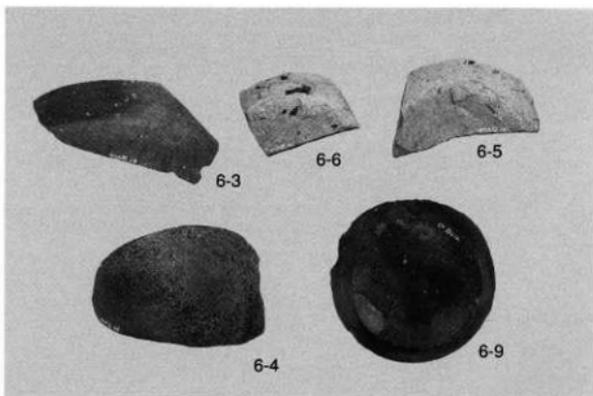


遺物出土状況

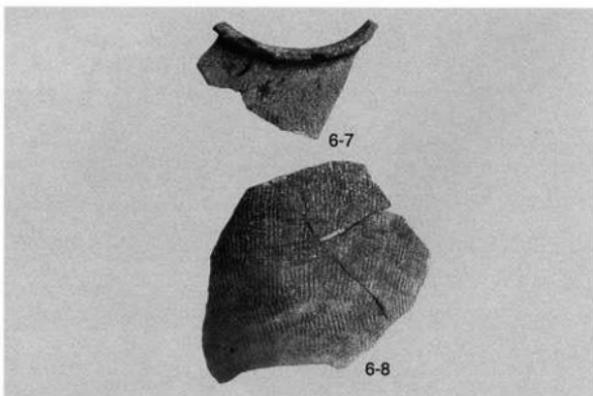




第1調査区  
出土遺物(1)

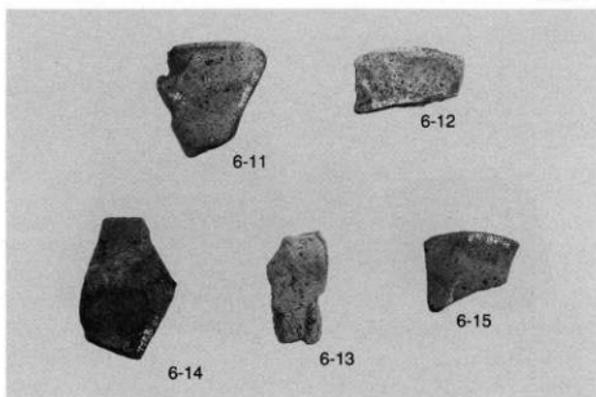


出土遺物(2)

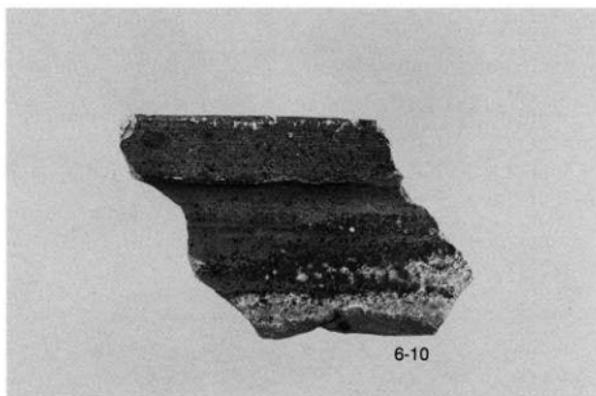


出土遺物(3)

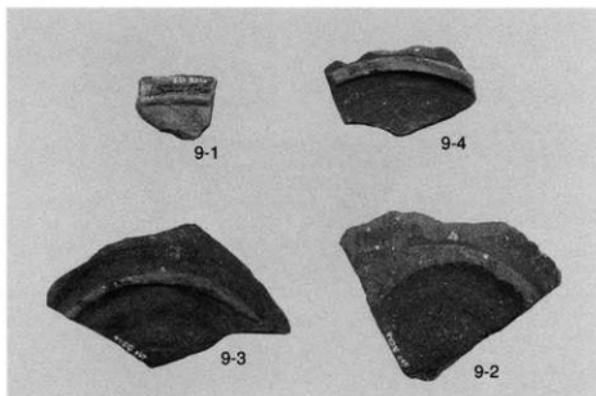
出土遺物(4)

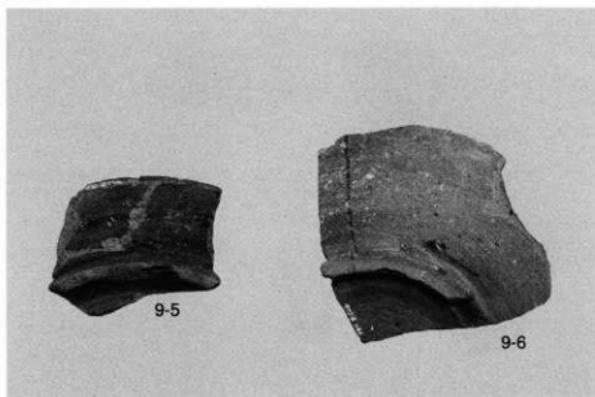


出土遺物(5)

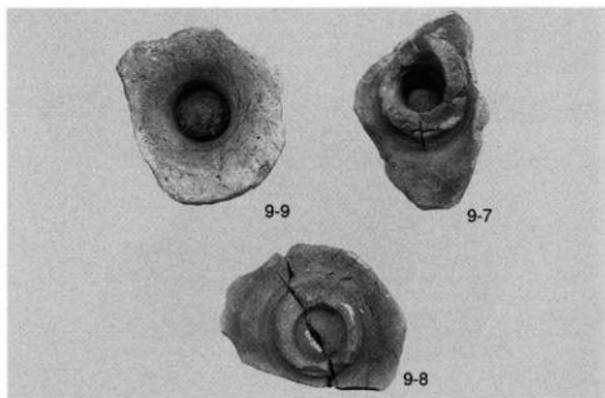


第2調査区  
遺構面直上  
出土遺物(1)

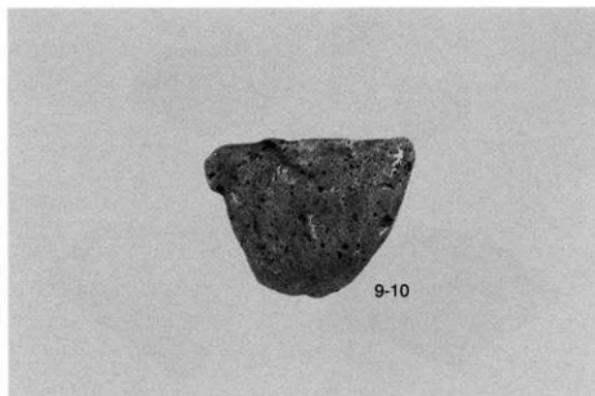




出土遺物(2)

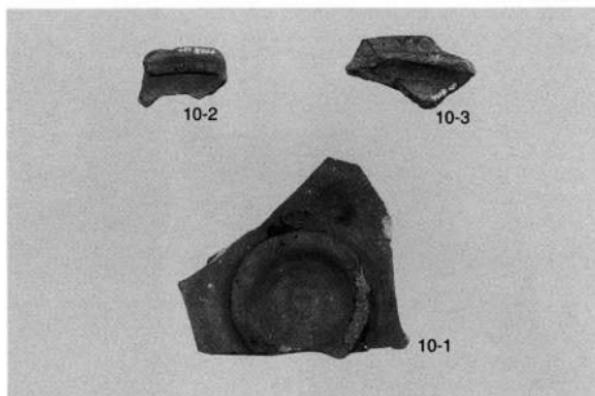


出土遺物(3)

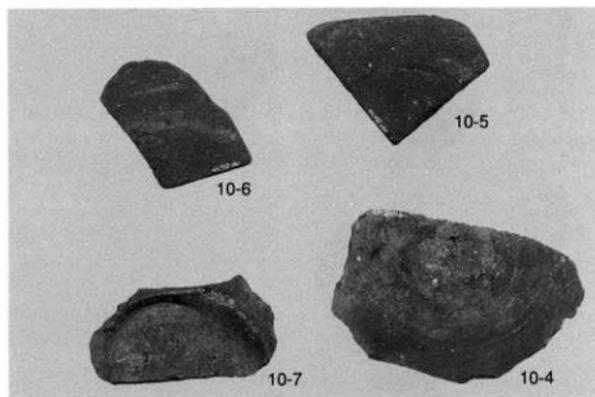


出土遺物(4)

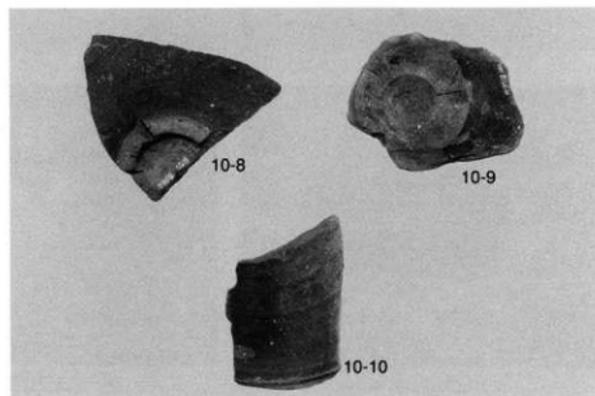
第2調査区  
遺構外出土遺物(1)

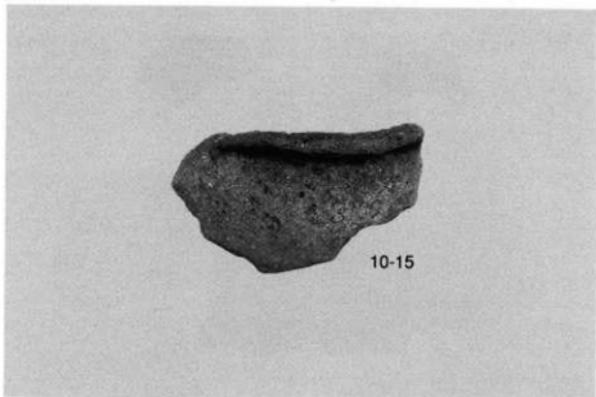


出土遺物(2)

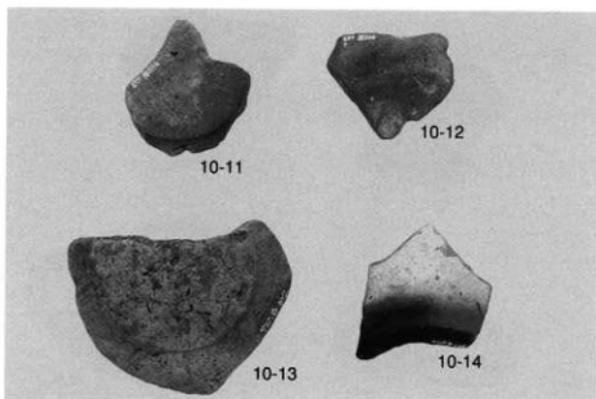


出土遺物(3)

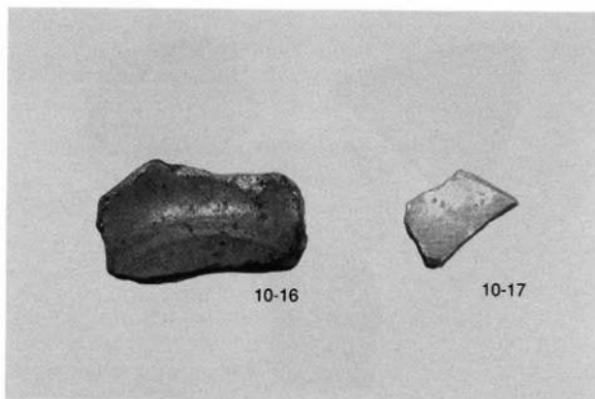




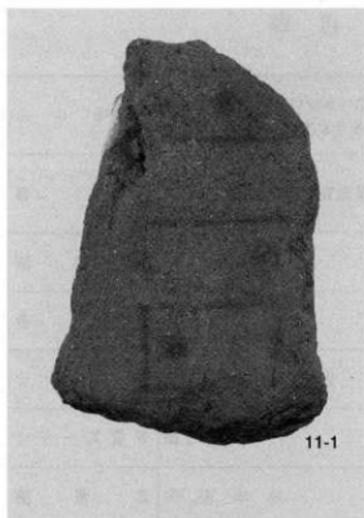
出土遺物(4)



出土遺物(5)



出土遺物(6)



11-1



11-1

第2調査区 幾何学模様土器 (左：内面、右：外面)



11-2



11-3

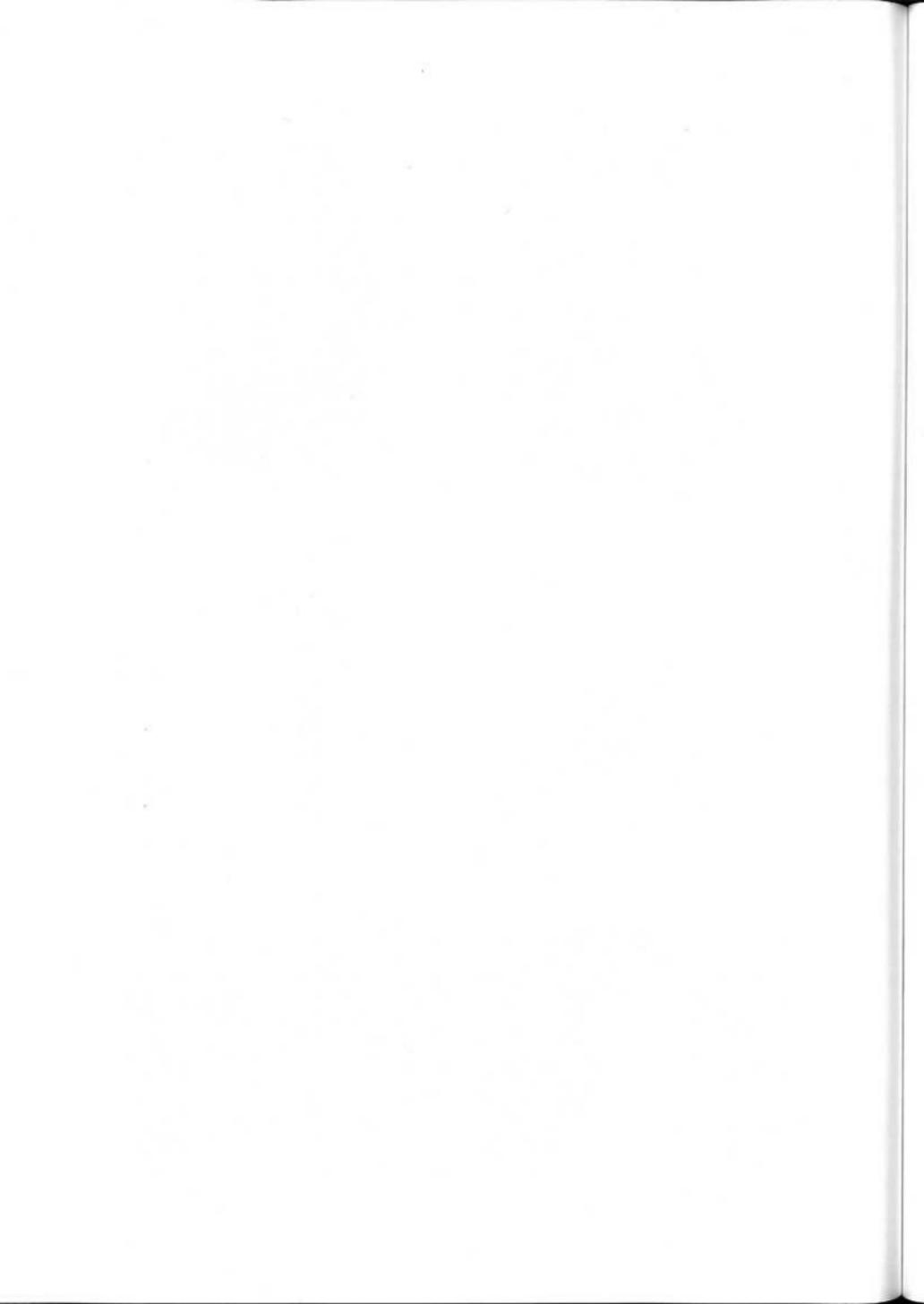
第2調査区 石器 (左)、土製品 (右)



光嚴寺跡付近宝篋印塔



東光寺跡付近宝篋印塔



# 報告書抄録

ふりがな	いなんとうふちくけいえいたいくせいきばんせいびじぎょうにともなう さりほだにいせきはくつちようさほうこくしょ							
書名	以南東部地区経営体育成基盤整備事業に伴う佐利保谷遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ	斐川町文化財調査報告							
シリーズ番号	第29集							
編著者	穴道年弘							
発行機関	斐川町教育委員会							
所在地	〒699-0592 鳥根県藤川郡斐川町大字莊原町 2172 番地 TEL0853-73-9190							
発行年月日	平成16(2004)年12月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
佐利保谷遺跡	鳥根県藤川郡斐川町大字神庭	32401	Y112	35度 22分 41秒	132度 51分 22秒	20030926 ～ 20040322	362 m <sup>2</sup>	農道整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
佐利保谷遺跡	集落遺跡	古墳時代～中世		溝状遺構		須恵器 土師器 土師質土器 陶磁器 製塩土器 黒曜石		製塩土器

斐川町文化財調査報告 第29集

以南東部地区経営体育成基盤整備事業に伴う

**佐利保谷遺跡発掘調査報告書**

2004年12月20日発行

編集・発行 斐川町教育委員会

〒699-0592

島根県簸川郡斐川町大字莊原町2172

TEL 0853-73-9190

印刷・製本 島根県農協印刷株式会社